

## クリティカル・ソーシャルワークの教育におけるドラマ/演劇の手法（活動）

## ー演習教育での役割に焦点を当ててー

○ 日本女子大学 小山聡子 (2297)

クリティカル・ソーシャルワーク ドラマ/演劇の手法 省察的实践

**1. 研究目的**

2000年代以降、各種のソーシャルワーク批判に対峙し、行き詰まりを感じる中で、2008年にドラマ/演劇の手法（活動）に出会い、自身のソーシャルワーク演習教育を打開する可能性を秘めていることを直感した。2009年から8年間、当該ドラマ/演劇の手法（活動）を初年時教育の一環としてのコミュニケーションワークショップに適用する中で、筆者に感じられた体感の背後にあるものを描き出すことが本研究の目的である。

**2. 研究の視点および方法**

まず、社会福祉基礎構造改革以降のソーシャルワークに寄せられる批判及び、社会福祉士を中心とするその教育の動向をレビューする。次に、内外の文献をもとに、カナダやオーストラリアを中心に発展したクリティカル・ソーシャルワークの来歴と内容を概観し、現下のソーシャルワーク教育が内包する自己矛盾を止揚する可能性を持つものとしてそれを位置づける。今後、その考え方を教育に適用する具体的方法の議論がさらに必要であることを確認し、その一方法としてドラマ/演劇の手法（活動）が持つ意味付けについて先行研究およびキーパーソンからの聞き取りと筆者自身の教育実践を通して論じる。

**3. 倫理的配慮**

文献及びURLから入手した情報の検討は日本社会福祉学会の倫理指針に基づいて実施した。筆者自身が実践した集中授業の内容を研究対象とすることについては、所属先大学の倫理委員会を通して実施した3年度分を対象とする。サイコドラマの短期集中講座をフィールドワークすることについては、担当者増野肇とメンバーに了承をとった。さらに日本演劇教育連盟委員長、正嘉昭からの聞き取りは同じく上記倫理委員会を通して実施した。

**4. 研究結果****(1) 現下のソーシャルワーク教育の課題**

1987年に社会福祉士資格が創設されて以降、ソーシャルワークは名称独占ながら、専門性や独自性を確立しようとしてきた。しかし、特に2000年代以降ポストモダンの社会思想や障害の社会モデル等による多くの専門職批判を受け一方で、新自由主義の社会動向における「専門性」の低下も批判されている。社会福祉士は2018年現在、ソーシャルワーク専門職として政府が唱える地域共生社会の実現に向け、住民主体や当事者中心を重視しつつ幅広いニーズへの対応を迫られている。分野横断や業種横断を可能にするワーカーの主体的機能の可視化も言われる中、実習及び演習の質の改善が目指されている。

**(2) クリティカル・ソーシャルワークの来歴と概要**

伝統的なソーシャルワークが実証主義によって科学化してきた歴史に対して、前述の批判及び近年のグローバル化、規制緩和、福祉国家の危機を踏まえたオルタナティブとして提唱されるのがクリティカル・ソーシャルワークである。モダニズムとポストモダニズムの両立を可能にする概念として、「主体」や「社会的文脈」、「権力」、「対話」をテーマに掲げてきた。日本では、北川、松岡、村田、田川、隅広、加茂、横田、舟木らの研究が注目される。そこでは、クリティカルな問いと省察的実践の有効性が挙げられるが、ただ未だにソーシャルワーク教育への適用の具体化について十分な議論が出来ているとは言い難い。

### (3) ドラマ/演劇の手法（活動）における教育的側面について

日本のソーシャルワーク教育では古くからロールプレイが導入されてきたが、これを含めて本領域に占めるドラマ/演劇の手法（活動）の意味を総合的に論じた研究は少ない。中根の研究は哲学者中村による「臨床の知」概念を引いて、教室空間において上空飛行的議論を脱却する必要性を説いた。中村は、演劇的知を上演・演技・身体的行為の即興性によって成り立つ豊かさであるとし、近代科学の知を含む北型の知に対立するものとした。演劇の世界ではジョンストンが評価への恐れ・未来への恐れ、見られることへの恐れが即興性と結びついたスポンタネイティーを阻むと論じている。また、演劇家の竹内は、言語対非言語という二項対立を廃して「身体の言語」という表現にて「身体」への回帰を説いた。

### (4) 筆者が取り組んできた教育実践のオートエスノグラフィ

筆者が2009年から8年間勤務先大学で取り組んできたドラマケーションによるコミュニケーションワークショップ（正嘉昭のリードによる）では、複数回学生と横並びで受講し活動を体感してきた。この体験に触発されて参加した今井純によるインプロのワークショップ、そして増野肇によるサイコドラマでも受講し体験する側となったことにより、過去のワーカー経験を踏まえたクリティカルな省察に身を置くことが可能となった。具体的なアクティビティを通して「場」における価値規範、自身の脆弱さや湧き上がる感情への気づき、無用な力み等マイクロソーシャルワーク教育への適用のヒントが与えられた。

## 5. 考察と結論

現下の社会情勢においてソーシャルワークの困難を語る方向は、専門（職）性をめぐって二方向に分裂している。クリティカル・ソーシャルワークの議論は2000年代に入ってから散見されるものの、それらを実際のソーシャルワーク教育に落とし込んだ議論や、社会福祉士等の資格教育に適用した議論はまだこれからである。また、各種のソーシャルワーク理論が相互の関係を度外視して並列に教育される実態にも再考が求められよう。

この試みを目指すにあたって、ドラマ/演劇をテクニックとしてではなく、根本理念として正當に位置づける研究が必要である。一つ一つのアクティビティが「場で自明視される規範」の察知に結びつき、民主的であるとは何かは頭による理解ではなく、行為の中の体感として得られること、また「即興」が安全に試みられる場所の確保が必要である。それらを笑いや楽しさと共に提供できるのがドラマ/演劇の手法（活動）であると言える。